

World Englishes から Lingua Franca へ

—「日本の英語」への示唆についての一考察

World Englishes to Lingua Franca - Implications for Japanese English

飯田 深雪

IIDA Miyuki

1. はじめに

現在、世界の英語使用のバランスが変化してきている。英語で行われる会話の 80 パーセントは英語を第二言語として使用する人の中でなされていると推計され、この中に第一言語として話すネイティブの数は入っていない。英語の国際化により、英語は英米人とだけ話す言葉ではなくなった。英米人に加えて、非英語圏のヨーロッパ、東アジア、中東、アフリカ、南米などの人と交流するときにも使う言葉となった。英語は、多国間コミュニケーションの言語となり、話し手の多くは英語を母語としない人々である。実際、英語を国内の「第二言語」とする人や、「外国語」として国際的なコミュニケーション間に使う人々のほうがネイティブ・スピーカーより多い。

英語が世界で最も広範囲に使われ、国際共通言語となったからと言って、アメリカ人やイギリス人などのネイティブ・スピーカーの英語がそのままの形で世界中に広まっているというわけではない。母語とする人の間にも、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア人などがそれぞれ独特の英語を話しているように、英語を母語としないアジア、アフリカ、非英語圏のヨーロッパの人などもそれぞれ特徴のある英語を使っている。英語が国際化したということは、英語が多様化したということで、例えば、以前に英米の植民地であった国々の人は、英語を「第2言語」として使いながら、それぞれの歴史的、社会的、文化的必然性に合わせて、独特の新英語 (New Englishes) を作ってきた。また、1967年に創設された ASEAN (Association of South East Asian Nations, 東南アジア諸国連合) は、現在、インドネシア、シンガポール、タイ、フィリピン、マレーシア、ブルネイ、ベトナム、ミャンマー、ラオス、及び、カンボジアの 10 か国で構成されているが、東南アジアという地域にまたがる地域協力機構であるにもかかわらず、組織と運営の全てを英語で行っている。英語はもちろん ASEAN 諸国の母語ではないが、この地域で最も話者人口が多い共通第二言語であり、英語の有用性が評価されている。ヨーロッパでも、European Union (EU) に属する国の小学校 1 年から英語を学ぶことが、「母語プラス 2 つの外国語」政策の一部として行われている (河原 2004)。このように、英語はネイティブ・スピーカーを含む多くの人々の異文化コミュニケーションの手段になった。英語は、英米文化から切り離して使用することが可能であり、この事実は英語に新しい役割を与えている。一般に、英語を母語としない人々

は、英米の文化を学習するために、そして、ネイティブ・スピーカーと同じように流暢に話すために英語を学習しているわけではなく、自分の属する民族、文化を意識し、自分を国際的な場面で表現する道具として使用している。英語は英米文化を模倣する手段ではなく、世界の人々を相手に自分の思うこと、感じることなど、自己のアイデンティティーを表現する道具となっている。例えば、シンガポール人はシンガポール人らしい発音や文法や語彙を持ったシンガポール英語、インド人はインド人らしいインド英語を話すことになり、その結果、英語にいろいろな差異が生まれてきたが、それぞれが「世界の英語」の一つとしてのアイデンティティーを持っている。

しかし、日本では、「ネイティブ・スピーカーの英語が本物であり、他の英語は偽物」という考えがうかがわれ、いまだに、英語は英米文化とのつながりが深いと理解されがちである。本稿では、まず、1) グローバル化による、かつて英語使用者が区分されてきた「English as a Native Language:第一言語としての英語」、「English as a Second Language:第二言語としての英語」、「English as a Foreign Language:外国語としての英語」の枠組みの変化と、「World Englishes」、「English as an International Language」、「English as a Lingua Franca」を概観し、「世界の英語」が扱われている現状と現在の「日本の英語」の在り方を考察し、今後の日本における英語使用及び教育についての示唆を探りたい。

2. English as a Global Language(地球語としての英語)

2.1. ワールド・イングリッシュ(World Englishes)の3つのサークル(円)と、国際語としての英語(English as an International Language(EIL))

英語がグローバルに使用されるようになり、グローバルな英語使用についての研究も増え、「World Englishes」、「English as an International Language」、「English as a Lingua Franca」などバリエーションがみられるようになってきた。これら3つは、交換可能な同義語と考えられる場合もあるが、厳密には異なる目的や焦点を持つ。世界の英語使用者の分布の調査で最も知られているのは、カシミール出身の Kachuru が地球上の様々な英語のバリエーションをクラス分けするために作った、以下の World Englishes のサークル(円)である。

- ・The Inner Circle(3億7千5百万人)「英語の知識を供給するサークル(内円)」
(English as a Native Language(ENL) イギリス、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドなど)
- ・The Outer Circle(3億7千5百万人)「英語の知識を発展するサークル(外円)」
(English as a Second Language(ESL) 香港、インド、シンガポール、ケニア、マレーシア、フィリピン、ザンビアなど)
- ・The Expanding Circle(7億5千~10億人)「インナー・サークルの英語の知識に頼るサークル(拡張円)」

(English as a Foreign Language(EFL) フランス、ドイツ、オランダ、ポーランド、ハンガリー、中国、韓国、ベトナム、日本など)

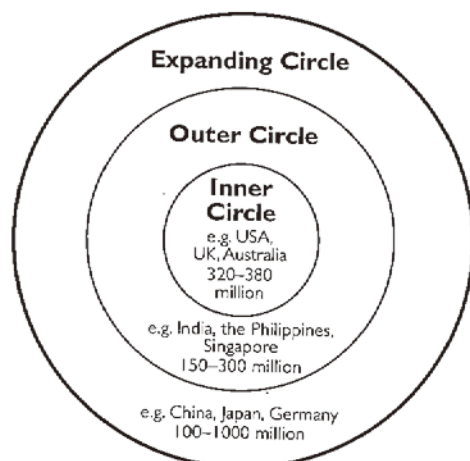


図1: Kachru's three circle model of World Englishes, 1985 from Crystal, 1997:54

Kachru は、イギリスから他の国へ移動した人々が英語を使う国々をインナー・サークル(内円)、イギリスの植民地政策の影響で、英語を行政、司法などで使用し、英語を第二言語とする国々をアウター・サークル(外円)、そして、この2つのサークルから発展して English as an International Language(EIL) として英語を使っている国々をエクспанディング・サークル(拡張円)として区別した(図1)。しかし、Kachru のワールド・イングリッシュの内円、外円、拡張円には問題点も指摘されている。最も頻繁にグローバルな英語の指針にされてきた Kachru のサークル・モデルは、もともと英国と植民地との英語の関係を明らかにする目的で作られたもので(その後世界に発展しているが)、民族の地域性や遺伝性などを基準にしており、言語使用者自身のアイデンティティーや英語使用の目的を基準にしていない。つまり、英語圏の植民地であったシンガポールのような外円の国では「その地で発展した」英語としているが、日本を含む、増え続けている拡張円の国は、「内円の英語から知識を得る」と言う扱いで、現存するそれぞれのバリエーションに独立したアイデンティティーが与えられておらず、内円に従属することになっている(McArthur, 1998)。

一方、次の図2の McArthur(1995)の World Englishes の円は、Kachru のサークルと比べ、伝統的な English as a Native Language(ENL)の国々を中心に広がるのではなく、すべての英語使用者の中心にスタンダード・イングリッシュが置かれており、英語使用者全体を公平に含んで示されているので、より平等である。また、English as an International Language (EIL)を提唱したハワイ大学の Smith (1983)は、EIL は、英米以外の変種の英語間でなされる国際コミュニケーションの助けになる言語であるとし、使用

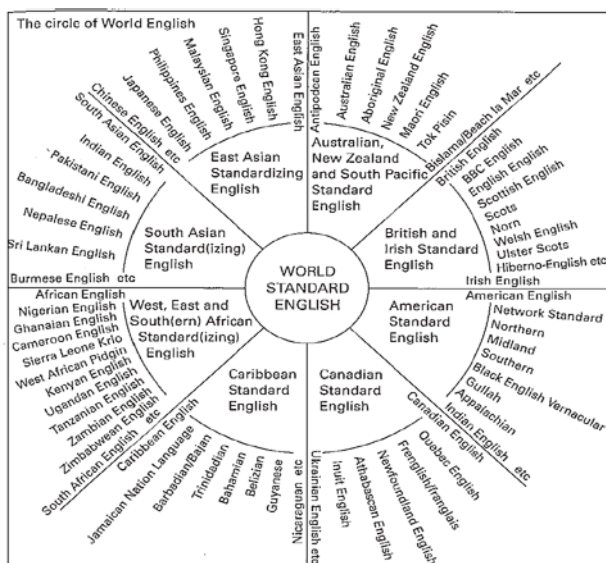


図 2 McArthur’s circle of World English, Crystal(1995)

目的と機能の多様性の点から捉えた言語観を組み入れた国際語としての英語を以下のように定義した。

English belongs to the world and every nation which uses it does so with different tone, colour, and quality...English is one of the languages of Japan, Korea, Micronesia, and Philippines...No one need to become more like Americans, the British, the Australians, and the Canadians or any other English speaker in order to lay claim on the language. (Smith, 1983 :2)

このように、Smith は、英語は誰のものであり、アメリカ人やイギリス人のようなネイティブのように「なる (become) 必要はない。」と定義づけた。彼は、多様な英語使用者それぞれの英語を積極的に推進するために、教育モデルも現地の教育を受けたモデル話者をターゲットにすべきであるとした。つまり、彼の提唱する EIL では、英語が第一言語、第二言語、または外国語であるかどうかという「制度」に関わらず、すべての人が英語の対等な使用者なのである。

同じく EIL の提唱者、ストックホルムの研究者 Modiano は、Kachru の World Englishes では、英語の言語帝国主義が広がることになるとし、非ネイティブ・スピーカーそれぞれの文化の尊厳を犠牲にしないために、English as an International Language (EIL) において、英語使用者それぞれの使う英語はネイティブ・イングリッシュと比較して劣るものではなく、品格のある英語であると定義づける必要があるとし、世界の英語を図3の花びら型で表した。

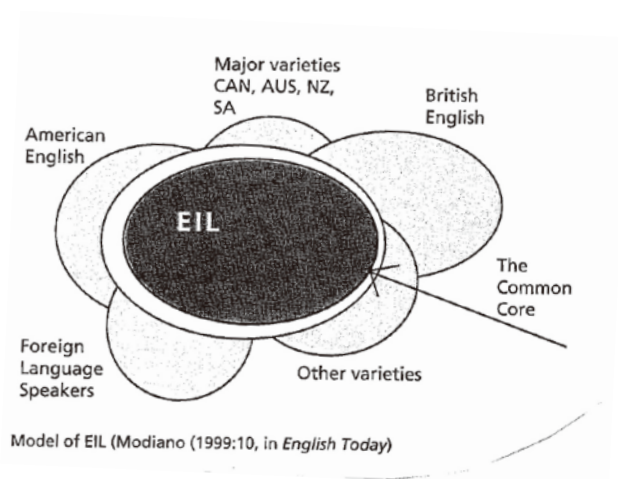


図 3 Modiano (1999:10)

この図では、World Englishes の内円(アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアなどの英語)と外円(英語を第二言語または社会の公用語とするインドやシンガポールなどイギリスやアメリカの元植民地の英語)と拡張円(外国語として英語を使用する中国や日本などアジア、非英語圏のヨーロッパ、南アメリカやアフリカなどの国の英語)とが平等に EIL の中心を共有している点で、それぞれの文化や母語(または母語の影響)への配慮がされている。

2.2. 英語リング・フランカ(English as a Lingua Franca)

World Englishes の拡張円を中心に世界の英語を捉えているのが、英国サウザンプトン大学の Jennifer Jenkins と ウィーン大学の Barbara Seidlhofer が提唱する English as a Lingua Franca (ELF) である。ELF も、Modiano の EIL と同様に、それぞれの使用者の文化を平等に尊重することが必要であるという立場をとる。ELF も、英語の多様性を積極的に評価し、国内語(母語としている国)だけではなくそれぞれの英語使用者に配慮して相互理解を達成することを目的とした点で Smith や Modiano の EIL と共通している。Jenkins らは、「多様性はそれぞれの文化である」として、文化の違いを尊重し、言語としては、Lingua Franca(英語にその地位を取って代わられるまで、ヨーロッパでリング・フランカおよび外交語としての地位にあったのがフランス語であったことから、共通語のことを指す)という考えのもとに、多様な英語でのコミュニケーションのための Common Core(共通の核: 無理なく話をするためにここまでは受容するという最低限の同意)を作ることを提案している。EFL(English as a Foreign Language: 外国語としての英語)と ELF(英語リング・フランカ)の捉え方の違いは、EFL では、ENL(English as a Native Language: 母語としての英語)と違う英語はマイナス要因とみなし、他言語からの影響を受けた英語や他言語が混ざった英語はエラーととらえたが、ELF では、他言語の干渉を受けた英語は、「世界の英語」の一つとして受け止め、エラーではなく英語が多様化して進化した肯定的なものと考え、その中での共通理解のコアを探る。(Jenkins 2006, 2009)。このように、ELF は、伝統的に標準英語と言われてきたものとは違う言語にもアイデンティティーを与え、「劣っていると考えずに、共通理解のもとに認めていこう」とする。

Jenkins の ELF の共通理解の核の特徴には、他言語が混ざる(コード・スイッチングなど)、発音や文法、語彙に母語の影響があるなどのバリエーションがある英語に対して適応するという方略をとる。(例えば、ネイティブ以外に発音しにくい[th]、[l]、[r]の発音、及び、すべての子音の後に母音が入る、細かいストレスが入るなどの発音におけるバリエーションを受け入れるなど。) また、「正しい英語」の定義に対し、コミュニケーションの効率に合った優先順位を付ける(ネイティブ以外の英語話者と話す場合、コミュニケーションのツールとしての有用性を尊重すること)などがある。Seidlhofer は英語以外の母語を持つ 49 か国の人同士の自然な会話をオーディオに採り込み、Vienna Oxford International Corpus of English (VOICE) にまとめ、「VOICE of Europe」や「VOICE of Asia」について調査し、多様な英語のバリエーションの中での共通理解のための核を探っている。ELF の英語の「共通の核」については、結局は「始めは簡単な英語で、その後で正しい英語を覚えればよい。」という、ENL 至上主義で、目的と矛盾したことにならないかと言う指摘もあったが、最近では、「世界の英語」の研究の一つとして認められている。

3. 英語のバリエーション

World Englishes、または English as an International Language とされるものの中には、地域によって様々なバリエーションがあると繰り返してきたが、では、それにはどのような例があるのだろうか。

3. 1. イギリス、アメリカ、オーストラリアなど、ネイティブ・スピーカー (ENL) の英語

イギリス、アメリカ、オーストラリアなどの英語にも地域差がある。イギリス英語とアメリカ英語の話者が、共通の理解でコミュニケーションできない単語がある。例えば、pavement 歩道(イギリス)と道路の舗装(アメリカ)や、bungalow 平屋の家(イギリス)とバンガロー風別荘(アメリカ)、smart 賢い(イギリス・アメリカ共通)、手入れの行き届いた(イギリス)、また、quite は、否定的または中立の意味(イギリス)、肯定的(アメリカ)など、様々なバリエーションがある(Trudgill and Hannah, 2002: 85-88)。

オーストラリアには、植民地時代のイギリス性質の英語をオーストラリア英語にしようという動きもあったが、オーストラリアで発展した労働者階級の言葉、ブロード・オーストラリア英語の力も強かった。やがて、アボリジニの言葉や、アジアや東ヨーロッパや南ヨーロッパからの移民の言葉などが混ざり、現在は一般のオーストラリア英語ができているが、多様性がある英語で、「Australian Englishes」とも呼ばれる。また、アメリカには、ネイティブ・アメリカンの文化に根付いた言葉などが入るネイティブ・アメリカンの英語、南部訛りから変化した、発音などに特徴があるアフリカ系アメリカ人の英語、スペイン語の影響を受けたヒスパニック系移民の英語、独特のアクセントを持つアジア系移民の英語などがある。

イギリスのネイティブ・スピーカーの英語では、メイン・ストリーム(標準英語と言われるイギリス英語)における英語の差異は些細な部分だが、地域や社会階級によって音声と音韻において(訛りなど)違いがあるようだ。しかし、標準とされる RP(Received Pronunciation)または、BBC English や Queen's English を話す人は、実際には、イギリス人の 3-5 パーセントしかいないという(Trudgill-Hannan, 1985, 2)。

3. 2. アジアの英語 (Asian Englishes)

インド、西インドのスリランカなど元イギリスの植民地の英語には、伝統的なイギリス英語と違う表現や、

傾向があり、発音において、子音の音[th]の発音の代わりに[t]や[d]を使い、[thin]は [tin]に、[this]は [dis]になる。数量の数え方 *much sweets*(Singapore)や *few fishermen*(West Africa)、代名詞では、*My husband, she was a student*(East Africa)、*My mother, he live in kampong*(Malaysia))、語順で *A two-hour exciting display*(Ghana)などに母語の影響があるとされる。さらに、動詞の三人称単数現在の[s]をつけない (Phillipines, India)、現在形で過去を表す (Hong Kong)、時制の使い方の違い *I still eat*(Malaysia、付加疑問詞への福建語の影響 *lah?* (Singapore)、語彙に、*female teacher* に *teacheress* (India)を使うなどのバリエーションがある。しかし、このような元植民地の国々では、それぞれの地域やインド英語などのネイティブ同志ではバリエーション英語を使うが、政治や法律などには、世界共通の文法に沿った英語が公用語として使われるように努力され、国際語としての英語の位置を得ている。

ASEANでの英語使用によるASEAN関連諸国での英語の使用の増加により、マレーシアやシンガポールなどでは小学校1年から英語教育が始まり、それに続き、中国と韓国でも3年から、日本でも、2011年に5、6年生からの外国語活動が始まったことから、アジアでの英語の必要性はますます大きくなっている。ASEANの英語は、会議でのそれぞれの国の訛りなどのデメリットはあるが、会議出席者全員の直接対話ができるというメリットがあり、英語は、ASEAN地域で最も話者人口が多い共通外国語であるため、多くの人が会議に参加できる。また、ASEANの会議は、高コンテキストの会議であるため、通訳を使うと内容が伝わらないことがあるので、それぞれの英語を使うほうが「実用的」と考えられている(奥平、2004)。アジアの英語は、アセアン関連諸国を中心に各国それぞれのバリエーションが受け入れられているが、アジアの英語は、ENS(内円の人々)には説明の必要がある場合があるだろう。

日本の英語は、「外国語として勉強している」ので、英国やアメリカの英語を無視しての使用は避けるべきであるという考えが一般的だが、最近の事情は変わってきている。日本国内においてもたとえば、企業や大学などで、日本人グループの中に英語しか話せない人が入ってくる場面が多くなり、その場合は、日本人同士も英語で話すことになる。英国人やアメリカ人でない者同士が、英国的または、アメリカ的なものを仲介としなければ相互に理解できないと考えるのはおかしい話であるし、例えば日本人独特の英語とアジア人独特の英語での会話の場合、理解可能であるなら英米的な英語である必要はない。アジアの人は、一般に日本人より英語の現代的、国際的役割や実利性を理解していて、日本人ほど間違いを心配しないで、下手でも、訛りがあってもどんどん使う人が多い。“Thank you”が“Sank you”でもよいし、時々、英語を普段あまり使わない人から、“You Japan, is it?”(You are from Japan, aren't you?)などと聞かれることもある。また、日本の英語の特徴としては、[l]と[r]、[th]と[s]、[v]と[b]の発音の区別、母音添加 *drink*→*dorinku*、冠詞、品詞の使い方の間違い *I am a Yamada, My most impression man is*、日本文化や日本語からの影響からくる例で *May I borrow bathroom?*(日本語の「トイレを借りる」がそのまま英語になる)、*She is energish.*(日本語英語「エネルギー」がそのまま英語として使われる)などがある(末延、1990)。

3.3. 「標準英語」(Standard English) とは?

これまでのバリエーションを考慮すると、「世界の英語」の中での「標準英語」は、指針とされる英語とされた World Englishes の3つの円の内円のENSの中でも簡単に定義できるものではないことがわかる。

ネイティブ・スピーカーは3億7,500万人いると言われるが、英国、アイルランド、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、カリブ諸島、ジブラルダル、フォークランド諸島などで英語のネイティブ・スピーカーである人たちが全く同じ英語を使っているわけではない。同一のものを異なった単語で表す例もあるし、つづりの違いなどもあり、どれが標準と決めることはできない。ブリテン島の教育のある人たちが使う地域言語で、一般に文書や学校や大学などの指導言語として使われ、ラジオやテレビで使われる言語がイギリス英語のスタンダード (Hudges and Trudgill 1979) というものが標準的であったが、「発音にこれが「標準」だ、などということとはできない。標準と呼べるのは、文法と語彙だけである (Stevens, 1985)。」と言う考えに見直され始め、さらに、Crystal が、「1980年代から標準英語についての論議があるが[...]標準英語とは、最も評判がよく(語彙、文法、正しい文書法などについて)少数派の英語圏の国で多く使われている英語を標準英語として定義してもよい (Crystal, 1995)。」とした。このように、「標準英語」は変わっていくものであるようだ。

4. 国際語としての英語を日本の英語教育、及び学習者はどう考えていけばいいのか。

今、日本では他のアジアの国々に遅ればせながら小学校でも外国語活動が始まり、英語教育はますます盛んになりつつあると言える。テレビでは英語があふれているし、ラジオには英語の番組も登場している。また、高等学校における SELHi (Super English Language High School) の推進、企業における英語運用能力試験の導入からも、日本における「英語の位置づけ」がわかる。グローバル・イングリッシュの研究者である日野は日本の英語について、

[私が]モデルとして一貫して追い求めてきたのは、一言でいえば、「Good Japanese English」である。コミュニケーションの手段として言語を学ぶ場合、言葉に思考を乗っ取られたのでは、言葉を学ぶ価値そのものが疑わしいと考えるからである。すなわち、米国的価値観の表現手段としてのアメリカ英語で妥協するのではなく「日本的な思考様式を表現できると同時に国際コミュニケーションを効果的に遂行できるような英語」を目指してきた (日野 2010:39)。

と、日本の思考方式を使った日本の英語使用を強調している。これからの日本の英語教育は、国内外で多様な目的で英語が使われている現実を更に認識し、学習者に対して、その目的の多様性を明らかに示していく必要があるだろう。英語使用の目的は、国や地域や個人によっても大きく違うが、英米文学を専攻する学生であれば、イギリス英語やアメリカ英語を古典のみならず、多様な元植民地の英語、アフリカ系アメリカ人の英語、及び移民の英語なども文学作品から読み取ることになるので、様々な地域の表現や発音なども理解する必要があるだろう。また、工学部など、英語が専門でない学生であれば、グローバル・ビジネスや研究の現場での将来の仕事相手である多様な国の人とコミュニケーションをするために、現地の言語や、ELF が提唱する「英語の共通の核」の知識を身に着けることがより必要であるかもしれない。

「国際英語の言語的・文化的多様性に親しむことは、表面的な言語技能の養成だけにとどまらない人間教育としての意義を有する」と、日野は述べているが (日野, 2010)、これに関して、小学校の外国語

活動に社会の誤解があるように思う。小学校英語関連の雑誌を見ると、「ハロウィーンのコスチュームを楽しむ」、「クリスマスを楽しむ」などの特集を見かけることが多いが、英米の文化を学びながら子どもが楽しむのは良いが、英語イコールアングロ・アメリカ文化を習得するという解釈は、非アングロ・アメリカ英語やマイノリティー文化への偏見や差別、さらには「英語を習うイコールアングロ・アメリカのようになりたい」「become」(Smith, 1983)。という価値観を子どもに植え付け、自己の文化やアイデンティティーを失うことになるのではないだろうか。2011年から小学校高学年での外国語活動が始まり、小学校の教員から「ALTの英語がイギリスやアメリカ英語でなく、訛っているので困る。」という心配を聞くことが度々あるが、アジア系や移民の個性のある英語を聞くことも、「小学校の言語活動は、英語活動ではなく、「国際理解教育」でなくてはならない(徳地、2008)。」という文部科学省の姿勢にもとっているし、小学校から大学までの長い英語教育の一部での経験として、多様な英語話者の英語や文化に触れることは意義のあることである。また、日本文化や日本の英語について、「日本はだめなんだけれども、英米ではこうする」、「イギリス英語の発音でなければだめだ」などと、特定の文化や発音などの真似を生徒に強要しないことを、指導する側や保護者が確認する必要がある。多様な英語を不完全な英語とみなすのではなく、正当で完全な「異種」英語の一つとみるのが大切である。

5. おわりに

ここまで述べてきたように、英語圏における民族の多様化による英語の多様化や、世界の人々のトランス・ナショナル(越境)な生活への変化を理解することなしに、本当の「使える英語」を学ぶことはできないということを社会が認識する必要がある。

英語は、世界的に普及したからこそ、共通語としての機能を果たすことができるようになった(英語だけが世界の共通語であるということではないことも忘れてはならない。)。World Englishes の「外円」と「拡張円」の国々が使う英語には「内円」の英語とは異なる特徴がみられるが、差異よりも共通部分が多いからこそ、共通語としての機能が保持されている。さらに、「外円」と「拡張円」の人々が使う英語を「内円」の国々が認めて、受け入れるからこそ、様々な英語によるコミュニケーションが行われている。このように、英語は異文化をつなぐ言葉になった。私たちは、小学校から大学までの英語教育において「Good Japanese English」を目指すうえで、英語が、「新しい英語」の使い方を取り入れて異文化をつなぎながら変化し続けているという論理を認識し、非現実的なネイティブ並みの英語力の獲得を学習者に押し付けることがないようにしなければならない。英語は世界での自己表現のツールになるのだから、教育現場でもいろいろな工夫をこらすことが求められているのではないか。

参考文献:

- 足立匡行 「国際英語と英語教育に関する一考察」『桜美林大学英語英米文学研究』、2007、pp.1-16.
 Crystal, David, *English as a global language*, Cambridge: Cambridge University Press, 1997, P. 54.
 Crystal, David, *Cambridge Encyclopedia of English Language*, Cambridge: Cambridge University Press, 2003.

- Gibson, Robert, *Intercultural Business Communication*. Oxford: Oxford University Press, 2000.
- Graddol, David, *The future of English?* British Council, 1997.
- Graddol, David, *English Next*, British Council. 2006, p.116.
- Gorlach, M, “Varieties of English and language teaching”, In C. Gnutzmann (Ed.), *Teaching and learning English as a global language: Native and nonnative perspectives*, 1999, pp. 3.21.
- 日野信行 「国際英語としての Japanese English のモデルの構築」『英語展望』、2010、118 号、pp.37-39.
- Hino, Nobuyuki, “The Teaching of English as an International Language in Japan: An answer to the dilemma of indigenous values and global needs in the Expanding Circle”, *AILA REVIEW*, 22, 2009, 103-119.
- 日野信行 「国際英語」小寺重明・吉田晴世編『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』、松柏社、2008、pp. 15-32.
- 本名信行編 『アジアの英語』、くろしお出版、1990.
- Hughes, Arthur, and Trudgill, Peter, *English Accents and Dialects*, London: Arnold, 1979, pp.85-88.
- Jenkins, Jennifer. “Which pronunciation norms and models for English as an International Language?” *ELT Journal*, 1998, 52/2, pp.119-126.
- Jenkins Jennifer, “The spread of English as an International Language: a testing time for testers”, *ELT Journal*, 2006, 60/1, pp. 42-50.
- Jenkins, Jennifer, *The phonology of English as an international language: New models, new norms, new goals*, Oxford: Oxford University Press, 2000.
- Jenkins, Jennifer, *World Englishes*, London: Routledge. 2003.
- Jenkins Jennifer, *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*, Oxford: Oxford University Press, 2007.
- Jenkins, Jennifer, “Exploring Attitudes towards English as Lingua Franca in the East Asian Context, ” In *Global Englishes in Asian Contexts*. Murata, Kumiko. & Jenkins, Jennifer. (ed.).2009, pp.40-56.
- Kachru, Buraj, “Standards, codification and sociolinguistic realism: The english language in the Outer Circle”, In R. Quirk & HJ.G. Widdowson(Eds.) *English in the world: Teaching and learning the language and literatures*, Cambridge: Cambridge University Press, 1985, pp.11-30.
- Kachru, Buraj, (Ed.), *The other tongue* (2nd ed.) , Urbana, IL: University of Illinois Press.1992.
- Kachru, Buraj, “World Englishes 2000: Resources for Research and Teaching”, In *Literary Studies East and West*. Honolulu, Hawai’i: University of Hawai’i, 2000.
- McArthur, Tom, *The English languages*, Cambridge: Cambridge University Press, 1998.
- Modiano, Marko, “Linguistic Imperialism Cultural Identity and EIL” *ELT Journal* Volume 55/4, Oxford : Oxford University Press, 2001.
- 奥平章子 「アセアンと英語」、竹下裕子、石川卓編 『世界は英語をどう使っているか』、2004、新曜社、pp.15-24.

- Pakir, Anne, "Standards and Codification for World Englishes," In *Literary Studies East and West*. Honolulu, Hawai'i: University of Hawai'i, 2009.
- Plat, John, *The New Englishes*, London: Routledge, 1984.
- Seidlhofer, Barbara, "Research perspectives on teaching English as a Lingua Franca," In *Annual Review of Applied Linguistics*, 2004m Vol.24, pp. 209-239.
- Seidlhofer, Barbara., & Jenkins, Jennifer, "English as a lingua franca and the politics of Property," In C. Mair (Ed.), *The politics of English as a world language: New horizons in postcolonial cultural studies*. Amsterdam: Rodopi, 2003, pp. 139.154.
- Seidlhofer, Barbara, "Closing a conceptual gap: The case for a description of English as a lingua franca", In *International Journal of Applied Linguistics*, 2001, p.11, p.133, p.158.
- Smith, Larry, *Reading English as an International language*, Oxford: Pergamon Press, 1983.
- Stevens, Peter, "Standards and English Language", *English Today*, 2, 1985, pp.5-8.
- Stubbs, Michael, *Educational Linguistics*, Oxford: Blackwell, 1986.
- 鳥飼玖美子 「地球語としての英語」をどう教えるか—学校教育の目的と役割』『英語展望』、2010、118号、pp.16—23.
- 徳地慎二 「非母語話者の積極的な ALT 活用について」、河原俊昭編 『小学生に英語を教えるとは?—アジアと日本の教育現場から』。2008、pp.31-47.
- Trungill, Peter, & J. Hannah, *International English*, 3rd ed, London: Arnold, 2002, pp. 85-88.
- Trungill, Peter, *Language in the British Isles*, Cambridge: Cambridge University Press, 1984.
- Vienna Oxford International Corpus of English ホームページ、www.univie.ac.at/Anglistik/VOICE. 11.25.2011.